

主 題：ユダの勧め④

聖書箇所：ユダの手紙 20節

ユダの手紙20節をお開きください。主イエス・キリストを信じる私たちが信仰者として主の前を正しく歩み続けて行くためにどうすればいいのか？そのことをユダは教えてくれています。

☆主の前を正しく歩み続けるために

1. 神の真理、神のみことばに立ち続けなさい

私たちが立つのは神のおことばです。人間のことばではありません。人間の知恵でもありません。みことばにしっかり立ちなさいということを17-19節で教えてくれました。

2. みことばを生きる者になりなさい

その具体的な歩みとして、

1) 霊的成長に努めなさい

このことを見て来ました。救いに与った者として、その信仰が主にあって成長することを願いながら歩んでいきなさいと。すでに学んだように、信仰が成長するためにはみことばに従う以外の方法はないということです。私たちはどうもそのことをないがしろにしていまいがちです。毎回の集会に参加するとか、聖書を毎日通読すること、それらは大切ですが、私たちがイエス・キリストに似た者に変えられていくこと、信仰が成長するために必要なことは、ただみことばを聞くだけでなく、聞いたみことばを実践することです。そのことをユダは教えてくれました。もちろん、ユダ以外にも、多くの信仰の勇者たちがそのことを私たちに教えてくれています。

みことばを実践するということは私たちはよく分かりましたが、同時に、みことばの実践は難しいということも分かっています。ですから、このような声をよく耳にするのです。「聖書が言っていることはよく分かるけれど、その実践はなかなか難しい！」と。確かに、難しいです。でも、難しいけれどそれは「できない」ということではないのです。「できる」のです。まず、私たちは「できる」ということを信じることです。

◎みことばの実践はできる、なぜなら、

(1) 神が命じているから : 神がそのように教えてくれているからです。神が私たちに命じるのは「実践できるから」命じるということです。もし、できないことを命じられているなら、それは私たちには重荷となります。「みことばを行いなさい」と言われたなら、それは私たちには可能なのです。

(2) 私たちが主からいただいた救いは生きていますから : 救いにはいのちがあるのです。神は私たちに「罪の赦し」を賜物としてくださった。私たちが何かをしたから、一生懸命、何かを達成するために善行を積んで来たから結果として神は救いをくださったのではなく、イエス・キリストを信じる信仰によってのみ、私たちはこの救いに与ったのです。でも、神がくださった救いは永遠の救い、罪の完全な赦しをもたらすだけではありません。救われたことを証明する良い行いがその人のうちには伴うのです。それによって、この人は本当に神によって救われたということを神ご自身が明らかにしてくださるのです。

いただいた救いが生きていますからです。その信仰者を変えていきます。その信仰者を成長させていきます。そして、よりキリストに似た者へと変えていくのです。そのような神のみわざが為されていきます。そのために、神が信仰者のうちに働いて、信仰者がみことばに従っていくという、その行いがなければ信仰は成長しません。ですから、確かに救いに与った私たちは神によって変えられて行くのですが、その過程において、私たちはみことばを実践するから変えられて行く、実践するからイエスに似た者へと変えられていくのです。つまり、「みことばの実践は可能だ」ということです。

聖書を見ると、確かに、みことばの実践によって成長していた様子が記されています。たとえば、Ⅱテサロニケ3:4に「私たちが命じることを、あなたがたが現に実行しており、これからも実行してくれることを私たちは主にあって確信しています。」と書かれています。今、もうすでにこの人たちはパウロが命じたことを行っている。そして、「これからも実行してくれることを私たちは主にあって確信しています。」と言います。ですから、「できない」と言っているではありません。しかも、彼らは実際にみことばに従うということを実践していたのです。

Ⅱテサロニケ2章には、この実践に関して大切なことをパウロは教えています。2:15「そこで、兄弟たち。堅く立って、私たちのことば、または手紙によって教えられた言い伝えを守りなさい。」

◎Ⅱテサロニケ2:15-17から、みことばの実践に関するパウロの教え

(1) 命令 : ここには二つの命令があります。「堅く立って」と「守りなさい」です。どちらも現在形の命令です。継続してそのようにしなさいと言っているのです。では、何をすべきなのか? 「私たちのことば、または手紙によって教えられた言い伝えを守りなさい」と言います。私たちから学んだ大切な真理を、また、手紙によって学んだ真理を、この当時はまだ新約聖書は完成していませんから手紙が送られたのです、その真理をしっかり守りなさいと、そのように命じているのです。今、私たちは見て来ました。神の命令は実践できると。このようにパウロはテサロニケのクリスチャンたちに「教えたことを実践しなさい」という命令を与えるのです。

(2) その秘訣 : そこでメッセージは終わっていません。もし、ここで終わっていたなら聞いていた人たちにはいろいろなリアクションが起こったはずですが。ある人は「では、頑張ろう」となったかもしれません。ある人は聞いて理解して「自分にはできない」と諦めたかもしれません。パウロはこの後、どうするのかを教えてください。2 : 16に「どうか、私たちの主イエス・キリストと、私たちの父なる神、すなわち、私たちを愛し、恵みによって永遠の慰めとすばらしい望みとを与えてくださった方ご自身が、」とあります。この16節を一言でいうなら「神が」です。これは「神」のことです。神がどういうお方で何を為されたのかということを説明しているのです。みことばの実践には神の助けが必要だからです。

この16節には大切なことが記されています。「私たちの主イエス・キリストと、私たちの父なる神、」とありますが、この箇所を直訳するとこうなります。「どうか、私たちの主イエス・キリストご自身と、私たちの父なる神である方が、すなわち、私たちを愛し、恵みによって永遠の慰めとすばらしい望みとを与えてくださった方が」と。つまり、だれが主語であり何を為されたのか、そのことが書かれているのです。主語は「私たちの主イエス・キリストであり、私たちの父なる神」です。二人の人物が記されています。当然、主語が複数なら動詞も複数です。でも、二つの動詞「愛し」と「与えてくださった」は二つとも単数です。なぜなら、主イエス・キリストと父なる神は一つだからです。二人の神が存在するのではなく、神はただおひとりです。しかも、敢えて、イエス・キリストを先に出しているということは、イエス・キリストの神性をパウロは特に強調して記したのでしょう。いずれにしろ、この神です。私たちを愛してくださり、そして、「恵みによって永遠の慰めとすばらしい望みとを与えてくださった」神なのです。

(3) その働き : この神が何を為さるのか? 2 : 17を見てください。「あらゆる良いわざとことばとに進むよう、あなたがたの心を慰め、強めてくださいますように。」と、ここに神の働きが書かれています。神がどんなことを為さるのか? 「慰め、強めて」くださるとあります。何のために? 「あらゆる良いわざとことばとに進むよう、」と、これが目的です。信仰者であるあなたが行いだけでなく、ことばにおいても神に喜ばれる者になっていく、そのために神が助けをしてくださるといことです。そのために神が働いてくださるのです。パウロはここで「あなたがたの心を慰め、強めて」と「心」と記していますが、これは「心」からことばや行いが出て来るからです。神は私たち信仰者ひとり一人の心に働かれます。そのときにその心から神が喜ばれることばや行いが出て来るのです。そして、この働きをしてくださるのが「神」だと言っているのです。

このようにパウロが教えたかったことは「私のことば、また、手紙によって教えられた真理をあなたがたはしっかり守っていきなさい」といことです。そして、守るために必要なことは、あなたの心に働いてくださり、あなたの心を慰め強めてくださる神の助けが必要だと言うのです。皆さんもよくご存じのように、私たちの本質的な問題は自分の知恵や力で何でもやろうとすることです。そうでなければ自分のプライドが許さないと、そのようにして私たちは生きて来ました。信仰の歩みはそうではありません。神に頼って生きていくのです。神が「しなさい」ということを神の力をいただきながら行っていくのです。このことを私たちは忘れてはいけません。

ですから、神の命令を見たときに、自分で出来るか出来ないかを判断するのではなく、神が「しなさい」と言われた以上、神の助けがそこにあるのです。「主よ、私はそのことを行っていきますから、どうぞ私を助けてください」とそのように神に助けを求めるのです。そのことをみことばは私たちに教えてくれたのです。

もちろん、みことばに従う、みことばを実践すると言っても、完全にすべてにおいて実践できません。失望の連続です。パウロでさえもこのように言っています。「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。」(ローマ7 : 18)と。私たちも自分の信仰生活を見て同じことが言えませんか? 神の前に喜ばれることをしたいとどんなに強く願っていても、私たちの歩みを見ると、自分勝手であり、自分中心であり、神よりも自分を喜ばせる選択をしたりと、失敗の連続です。でも、そのようにして私たちは生きているのです。大切なことは、まず、私たちが神が言われているように「神に従うことを心から願うこと」です。「従っていきたい」と心から願うことです。最初から「だめだ、できない」と諦めてしまっは何も起こらないといことです。

◎みことばに従っていくために

- (1) まず、私たちは神が「しなさい」と言われることを心から願うこと
- (2) それを可能にしてくださる神に頼って為すこと
- (3) 罪を告白しながら、失望しないで従い続けて行くこと

私たちは何度も失敗していると、そのうちに神の赦しに自分勝手な制限を設けてしまいます。「もう、こんなにしてしまったから神は赦してくださらない」と、そして、同じことを何度も繰り返して自分自身に失望してしまうのです。その歩みは間違っています。私たちは神の前に罪を告白しながら生きていきます。それがみこころに沿った歩みなのです。もちろん、私たちは罪を憎み罪から離れようとします。でも、現実には罪に敗北することが多々あるのです。そのときに主の前に罪を告白し悔い改めて主に従い続けて行くのです。

みことばの実践は可能だと神が言われています。問題はあなた自身がその神のことばを信じて歩み出すかどうかです。それを始めるときに神はあなたのうちに働きを始めていかれます。そのことが大切だと教えたユダは、次のことを教えます。今日のテキストであるユダ20b節をご覧ください。「…聖霊によって祈り、」とあります。私たちがこの地上にあってどのように信仰者として生きていくのか？二つ目に彼が挙げているのは「祈り」です。

☆みことばに生きるために 20-23節

1. 霊的成長に努める 20a節
2. 聖霊によって祈り 20b節

1) 祈りの大切さ

このことはもう言うまでもありません。皆さんはそのことを十分に理解しておられると確信します。あなたの信仰の成長において祈りは大変に重要です。ひとり一人の祈りの生活はその人の信仰生活を見事に反映しています。よく言われることですが、教会の動静を測るのは礼拝に何人来ているかということよりも、祈禱会に何人来ているかだと。私たちが今学んで来たように、私たちは神の助けを必要としている者です。ともに集まって神の前に執り成しを為す。神に助けを求める。このことは私たちの信仰の歩みにおいて重要です。ですから、祈りに関してどれだけのことを知っているかではなく、知っていることを実践しているかどうかが問題なのです。

私たちは神のみこころを知ってそれに従っていこうとするなら、祈りを忘れてはいけません。みこころを知るためには祈りが必要なのです。なぜなら、神のみこころは神がご存じだからです。当然のことです。残念ながら、私たちは神のみこころを完全に分かっていません。もちろん、聖書の中に記されていることは分かります。でも、日々の生活において分からないことがたくさんあります。神はそれをご存じです。ですから、私たちは当然それを求めるのです。

また、主のみこころが示されたときにそれを実践するためにも祈りが必要です。その証拠に、たとえば、パウロという偉大な信仰者を見ると、彼は人々のために執り成しをしています。また、彼は人々に執り成しを求めています。パウロは自分のために祈ってくれるように人々に求めたのです。エペソの教会に対してこのように願っています。エペソ6：20「私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。」と。また、コロサイ4：3、4にも「:3 同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。:4 また、私がこの奥義を、当然語るべき語り方で、はっきり語れるように、祈ってください。」と、祈りのリクエストをしています。パウロでさえも人々によって祈ってもらうことが必要だということが分かっていたので、このように祈りのリクエストを挙げたのです。

また、同時に、パウロは人々のために執り成しをしています。多くの人々、多くの教会のためにパウロが執り成しをしていたことはみことばが教えることです。ピリピ1：9「私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、」。

祈りの大切さはもう十分に皆さんは理解されていることでしょう。次に見たいのは「祈りとはいったい何か？」ということです。

2) 祈りとは？

ある人は自分の願っているもの、自分の欲しいものを手に入れる手段だと考えるかもしれません。でも、それは聖書が教えていることではないことは皆さんよくご存じです。このように言えます。

(1) 祈りとは、神への真の謙遜と服従を表す行為

祈る人は自分のすべてに神の助けが必要だと分かっている人です。神に喜ばれたいと願っている。でも、そのためにはすべての領域において神の助けが必要だと分かっています。だから、神の前に祈り続けるのです。イエスが「祈りなさい」と言われているから祈らなければならないのではなく、神に喜ばれるこ

とをしたいと願っている人は、自分の力でそれができないことを知っているゆえに、それを可能にしてくださいと神に助けを求めるのです。だれかに出会ったときにどういう話をするのか？どのようにキリストのすばらしさを証すべきなのか？この状況にあってどういう選択が神に喜ばれるのか？すべてをご存じの神に助けを求めなければ私たちは何もできません。

ですから、祈っている人は「神さま、私には知恵も力もありません。弱く愚かですからあなたの助けを必要としています。」と、まさに、心からなる謙遜を表しています。

また、同時に、「神さま、私はあなたのみこころを求めています。なぜなら、それを知ってそれに従いたいからです。」と。この後も見ていきますが、祈りは神への謙遜であり、そして、神への服従を表す行為です。このように言えます。祈っている人が自分の弱さを知って神に助けを求め続けているとするなら、祈っていない人はそこまで神の助けが必要だと思っていないと言えます。自分は大丈夫、自分で出来ると、そのような人を通して神は働きを為されないことはお分かりでしょう？

(2) 祈りとは、みこころを求める行為

「聖霊によって祈り、」と書かれています。これは聖霊のみこころに沿って祈ることです。聖霊なる神のみこころに沿って祈っていくということです。まさに、これが祈りそのものだと思いますか？最初に話したように、私たちの祈りは自分の願っているものを何とか手にするために、神と直談判してそれを手に入れようとする…。そういうことではありません。私たちは神のみこころが何かということを知りたいのです。ですから、神のみこころが示されることを求め、示されたみこころに喜んで心から従っていくのです。これは確かに従順な人の歩みだと思いませんか？神の言われることに従っていくのです。「神さま、この状況にあってどうすればいいですか？」と神に尋ねて、神が教えてくださることに従っていくとします。そのような歩みを神は望んでおられます。まさに、これが「祈り」です。

Iヨハネ5：14、15を見てください。私が読むのを聞いてください。「…神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。：15 私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでになえられたと知るのです。」、このようにこの箇所を読んでいる人はいませんか？「何でも神に願い事をすれば神はそれを聞いてくださる。私たちに必要なのは願ったことを神は聞いてくださるというその信仰だ」と。そのようには書いていません。私は敢えてある部分を飛ばしました。14節の初めに「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、」とあります。

願ったことは何でも聞かれると聖書は教えていません。祈りが聞かれるのは、その祈りが神のみこころを求めているからです。それは必ず聞かれます。こういうことです。私たちはみことばを開くときに、神の前に助けを求めます。「神さま、みことばを通してあなたのみこころを教えてください、あなたの真理を教えてください。」と、そのような祈りをもってみことばを開きます。そういう願い、祈りをもって皆さんは今日も集まって来られたでしょう。神は神のおことばを通して、ひとり一人に神のみこころを示してくださるのです。聖書に書かれていることは神のみこころなのです。神が何を望んでおられるのか、神が何を願っているのか？それはここに書かれているのです。ですから、私たちは正しくそのみことばを見ることが大切です。みことばを通して私たちはみこころを知るのです。

3) どのように祈ればいいのか分からないとき =聖霊が執り成してくれる=

私たちは毎日の生活の中でどのようにみことばを適用すればいいのか？ときに、私たちは大変な出来事が起こって困った状況に陥ってしまったり、予期しないことが起こったり、いろんな問題に直面したりして、「神さま…」と言いますがその後のことばが出て来ない。どのように祈ったらいいのか分からない、そんなことはありませんか？感謝なことに、神はあなたの心をご存じであり、あなたが神のみこころを求めているなら、どう祈ればいいのか分からないときには、あなたに代わって執り成してくださる方がいるのです。それはあなたのうちにいる聖霊です。

聖霊なる神が祈ってくださる。そのことをパウロはローマ書8章で教えてくれています。8：26「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいか分からないのですが、この「助けて」とは「手伝う」という意味で、イエスがマルタとマリヤのところを訪問されたとき、もてなしのために落ち着かないマルタがイエスにこのように言いました。「…主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」と、この「手伝い」が「助けて」と同じことばなのです。

私たちにはこのようなとき、どのように祈ればいいのか分からないというときがあります。「神さま、あなたのみこころを知りたい！でも、この状況でどのように祈ればいいのか分からない。」、「心配しなくてもいい。あなたの心をご覧になっておられる聖霊があなたに代わって執り成してくださる。」と。ですから、その後このように続きます。「御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。」と。

聖霊なる神は私たちのために何を為してくださるのか？神のみこころに従いたいと願っている信仰者

がその歩みが続けることができるように、あなたの心とともにいてくださり、あなたがみこころに従って生きていけるように、そのように聖霊なる神は執り成しを為してくださるのです。主イエス・キリストがこの地上におられたとき、彼の歩みは父なる神のみこころに完璧に従っていかれました。その方に似た者へと私たちは日々変えられていくのです。私たちの心にそのように歩んでいきたいという願いをくださった神が、その思いを私たちのうちに日々大きくしていつてくださるのです。神に喜ばれる人になっていきたい！と。

感謝なことに、弱い私たちはみこころが何か分からない、でも、そのことを完全に知らなくても、その私たちのことを分かっている聖霊が私たちがみこころに従って生きていけるように執り成してくださるのです。この箇所が私たちに教えてくれていることは、こうして聖霊があなたのために助けを与えてくれるということです。ですから、私たちに必要なことは、罪から離れて主に従っていくことです。主のみことばを正しく学んで、そのみことばに従いたいと決心して神の助けをいただきながら生きていくのです。私たちは日々の生活においていろいろなことを経験しますが、そのときにも何も心配することはありません。神がちゃんと導いてくださるからです。だから、その神の働きを邪魔しないために、私たちは自らの罪を神の前に告白しながら生きていくのです。そうして歩んでいきなさい、神があなたを助けてくださるからと言うのです。

みこころを求めて祈ることが大切だと、そのことを私たちは学ぶことが必要です。神のみこころがすべてにおいて最善だということ学ぶのです。だから、私たちが神のみこころに従って生きていけるときに、私たちはこの世のいかなるものをもっても得ることができない平安と喜びをもって生きることができるのです。神のみこころが最善だから、私たちは神のみこころを求め続けて行くのです。

「祈り」を考えると、ある人たちは「あなたが祈っているものを手にするためにはもっと熱心に祈れればいい。熱心に祈り続ければそれを手にすることが出来る。」と言います。確かに、そのように考えている人たちもいます。そういう人たちがいつも口にするみことばは、マタイ7章にある「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」(7:7)でしょう。「求めなさい。…捜しなさい。…たたきなさい。」とこの三つの動詞はすべて現在形ですから、そのように継続して行い続けて行きなさいということです。そうすればあなたの欲しいものが手にはいられます。聞いたことはありませんか？問題は、本当にそれが聖書が教えていることかどうかです。とても都合の良いみことばです。熱心に祈りさえすれば、信じて疑うことなく祈りさえすれば…と。

見てください。この箇所は山上の説教の最後の部分です。文脈を見ると考えさせられます。この7:7の前の7:6ではこのように言われています。「聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたを引き裂くでしょうから。」と。その後「求めなさい。…」と続きます。当然、これは関連しています。「聖なるもの」また「真珠」は神の真理であり、神のメッセージです。この当時、犬は汚れた危険な動物でした。豚もユダヤ人には汚れていると見なされていました。敢えて、こういう動物を使ってイエスが言わんとしたことは、このような危険なもの、汚れたものをちゃんと見極めるようにということです。そのような人たちに神の真理を語っても意味がないと言います。聖なるものを犬に与えても、豚に真珠を与えても、価値が分からないから踏みにじるのです。実際に、新約聖書にはイエスが、また、使徒たちが働きを為し真理を語ったときに、彼らはそれを拒否し語った者たちを迫害しました。まさに、彼らは犬や豚と同じなのです。真理の価値が全く分からなかったからです。

パウロがコリントへ行ったときのことが書かれています。そこでパウロがユダヤ人たちにメッセージを語ったときに、人々は反抗して暴言を吐いたとあります。使徒の働き18:6「しかし、彼らが反抗して暴言を吐いたので、パウロは着物を振り払って、「あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかかれ。私には責任がない。今から私は異邦人のほうに行く」と言った。」と。大変厳しい扱いをしています。なぜなら、彼らは語られた真理を歓迎するどころが、それを足で踏みにじったからです。そのような人たちが居るのです。ですから、必要なことは、霊的な判断力です。イエスがここで話しておられることは、神の知恵が必要だということです。だれが「犬」なのか、だれが「豚」なのか？そういうことを見極めるその知恵です。それを「求めなさい。…捜しなさい。…たたきなさい。」と言ったのです。

その後を見ると、7:8-11節「:8 だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。:9 あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。:10 また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。:11 してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましよう。」と書かれています。人間がそうであるように神も同じだと言います。自分の愛する者に最善を与えるのです。

惑わす者たちがたくさんいた、偽りの教師たちがたくさん出て来る。偽信者が出て来る。そういう中で

私たちにはしっかりした霊的な判断力、知恵が必要なのです。そのことを求めるようにイエスは言われているのです。ですから、この箇所は「熱心であれ、あなたの必要は与えられる」ということを教えているのではありません。

皆さん、繰り返しますが、私たちが学ぶことは「神のみこころは常に最善だ」ということです。神のみこころは神の栄光の現れです。神のみこころはあなたにとって最善です。私たちが求めるのはこの神のみこころです。だから、私たちが祈るときにはユダが言ったように「御霊によって祈りなさい」です。

確かに、いろいろな祈りの課題があります。愛する者たちのことやいろいろなことを執り成します。それらを神の前に持っていくことができます。私たちはその中で最善を求めます。「主よ、どうか、あなたのみこころを為してください。」と。そして、「あなたのみこころが為されたときに、それが私が望んでいるものと違ったとしても、私が望んでいないことであっても、そのみこころを喜んで受け入れてそれに従うことができるように私を助けてください。」と。それが神が求めておられる祈りです。

そのような祈りをもってこの地上での信仰生活を歩んでいきなさいと、そのようにユダが教えてくれるのです。信仰者の皆さん、神はあなたのことを愛して、あなたのために一番必要な救いを備えてくださった。大変な犠牲をもって救い主を送り、救い主によって罪を赦してください。それがあなたに一番必要だからです。何が一番必要であるかをご存じなのは神だけです。その方のみこころを求めることは、私たちに許されたすばらしい特権です。なぜなら、みこころを求めるなら神はそれを示してくださるからです。そして、神の助けをいただきながらそれに従うことによって、神のみわざが為され、神のみ栄が現わされ、私たちの信仰が成長していくのです。そのように生きなさいと言います。

そのように生きることは大変なことです。なぜなら、主のみこころだからです。どうか、このような祈りをもってこの新しい一週間も歩んでください。全能なる神との交わりを楽しみながら忠実な歩みが続けて行かれるように心から願います。